

1. それから、私たちは向きを変え、主が私に告げられたように、葦の海への道を荒野に向かって旅立って、その後、長らくセイル山のまわりを回っていた。
2. 主は私にこう仰せられた。
3. 「あなたがたは長らくこの山のまわりを回っていたが、北のほうに向かって行け。
4. 民に命じてこう言え。あなたがたは、セイルに住んでいるエサウの子孫、あなたがたの同族の領土内を通ろうとしている。彼らはあなたがたを恐れるであろう。あなたがたは、十分に注意せよ。
5. 彼らに争いをしかけてはならない。わたしは彼らの地を、足の裏で踏むほども、あなたがたには与えない。わたしはエサウにセイル山を彼の所有地として与えたからである。
6. 食物は、彼らから金で買って食べ、水もまた、彼らから金で買って飲まなければならない。
7. 事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。」
8. それで私たちは、セイルに住むエサウの子孫である私たちの同族から離れ、アラバへの道から離れ、エラテからも、またエツヨン・ゲベルからも離れて進んで行った。
そして、私たちはモアブの荒野への道を進んで行った。
9. 主は私に仰せられた。「モアブに敵対してはならない。彼らに戦いをしかけてはならない。あなたには、その土地を所有地としては与えない。わたしはロトの子孫にアルを所有地として与えたからである。
10. —そこには以前、エミム人が住んでいた。強大な民で、数も多く、アナク人のように背が高かった。
11. アナク人と同じく、彼らもレファイムであるとみなされていたが、モアブ人は彼らをエミム人と呼んでいた。
12. ホリ人は、以前セイルに住んでいたが、エサウの子孫がこれを追い払い、これを根絶やしにして、彼らに代わって住んでいた。ちょうど、イスラエルが主の下さった所有の地に対してしたようにである。—
13. 今、立ってゼレデ川を渡れ。」そこで私たちはゼレデ川を渡った。
14. カデシュ・バルネアを出てからゼレデ川を渡るまでの期間は三十八年であった。それまでに、その世代の戦士たちはみな、宿営のうちから絶えてしまった。主が彼らについて誓われたとおりであった。
15. まことに主の御手が彼らに下り、彼らをかき乱し、宿営のうちから絶やされた。
16. 戦士たちがみな、民のうちから絶えたとき、
17. 主は私に告げて仰せられた。
18. 「あなたは、きょう、モアブの領土、アルを通ろうとしている。
19. それで、アモン人に近づくが、彼らに敵対してはならない。彼らに争いをしかけてはならない。あなたには、アモン人の地を所有地としては与えない。ロトの子孫に、それを所有地として与えているからである。
20. —そこもまたレファイムの国とみなされている。以前は、レファイムがそこに住んでいた。アモン人は、彼らをザムズミム人と呼んでいた。
21. これは強大な民であって数も多く、アナク人のように背も高かった。主がこれを根絶やしにされたので、アモン人がこれを追い払い、彼らに代わって住んでいた。
22. それは、セイルに住んでいるエサウの子孫のために、主が彼らの前からホリ人を根絶やしにされたのと同じである。それで彼らはホリ人を追い払い、彼らに代わって住みつき、今日に至っている。

23. また、ガザ近郊の村々に住んでいたアビム人を、カフトルから出て来たカフトル人が根絶やしにして、これに代わって住みつけた。――
24. 立ち上がれ。出発せよ。アルノン川を渡れ。見よ。わたしはヘシュボンの王エモリ人シホンとその国とを、あなたの手に渡す。占領し始めよ。彼と戦いを交えよ。
25. きょうから、わたしは全天下の国々の民に、あなたのことでおびえと恐れを臨ませる。彼らは、あなたのうわさを聞いて震え、あなたのことでわななこう。」
26. そこで私は、ケデモテの荒野から、ヘシュボンの王シホンに使者を送り、和平を申し込んで言った。
27. 「あなたの国を通らせてください。私は大路だけを通して、右にも左にも曲がりません。
28. 食物は金で私に売ってください。それを食べます。水も、金を取って私に与えてください。それを飲みます。徒歩で通らせてくださるだけでよいのです。
29. セイルに住んでいるエサウの子孫や、アルに住んでいるモアブ人が、私にしたようにしてください。そうすれば、私はヨルダンを渡って、私たちの神、主が私たちに与えようとしておられる地に行けるのです。」
30. しかし、ヘシュボンの王シホンは、私たちがどうしても通らせようとはしなかった。それは今日見るとおり、彼をあなたの手に渡すために、あなたの神、主が、彼を強気にし、その心をかたくなにされたからである。
31. 主は私に言われた。「見よ。わたしはシホンとその地とをあなたの手に渡し始めた。占領し始めよ。その地を所有せよ。」
32. シホンとそのすべての民が、私たちを迎えて戦うため、ヤハツに出て来たとき、
33. 私たちの神、主は、彼を私たちの手に渡された。私たちは彼とその子らと、そのすべての民とを打ち殺した。
34. そのとき、私たちは、彼のすべての町々を攻め取り、すべての町々一男、女および子ども一を聖絶して、ひとりの生存者も残さなかった。
35. ただし、私たちが分捕った家畜と私たちが攻め取った町々で略奪した物とは別である。
36. アルノン川の縁にあるアロエルおよび谷の中の町から、ギルアデに至るまで、私たちよりも強い町は一つもなかった。私たちの神、主が、それらをみな、私たちの手に渡されたのである。
37. ただアモン人の地、ヤボク川の全岸と山地の町々には、私たちの神、主が命じられたとおりに、近寄らなかった。

説教

申命記2章は、イスラエルがカデシュ・バルネアから出発してからの荒野での道のりをモーセが回想する場面です。カナンの近隣諸国との関係を垣間見ることができて貴重です。民数記の要約と言えますが、異なる事実も記録されています。

カデシュ・バルネアで、四十年間、荒野をさまようことを神に宣告されたイスラエルは、「向きを変え」て出発しますが、「その後、長らくセイル山のまわりを回っていた」とあります。自分たちの不信仰のためとはいえ、約束の地カナンを目の前にしながらそこに入ることができない喪失感、おまけに四十年間荒野をさまよい続けなければならず、その間に荒野で死ぬと死刑宣告された絶望感のためにすっかり落ち込んでいたせいか、彼らは意味も無くただ「長らくセイル山のまわりを回っていた」のでした。

その彼らに神は命じます。「あなたがたは長らくこの山のまわりを回っていたが、北のほうに向かって行け。」

(3) 惰性で同じ所をぐるぐると回る堂々巡りのマンネリ生活は、楽ではあるけれども発展も前進もありません。それで神は方向転換を命じます。

神が最初に通過を命じるのはエサウの子孫（エドム）の領土です(4)。エサウはイスラエルの先祖ヤコブの兄で、イスラエルにとっては「同族」です(4)。このため、カナンを占領できなかったからといってこの地を占領してはならず、神は「彼らに争いをしかけてはならない。わたしは彼らの地を、足の裏で踏むほども、あなたがたには与えない。わたしはエサウにセイル山を彼の所有地として与えたからである。」と言われます(5)。それで、必要な食糧と水を彼らからきちんと買うよう命じます(7)。そうしなければならぬ理由として、神は言われます。「事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。」(7)

続いて、イスラエルは「モアブの荒野」へと進みますが、そこでも神は「モアブに敵対してはならない。彼らに戦いをしかけてはならない。」と命じます(9)。モアブは、イスラエルの先祖アブラハムの甥ロトの子孫で、やはり遠い親戚に当たるので、そこを占領することは許されません。エドムと同様、その地は神が「ロトの子孫」モアブに「所有地として与えた」のでした(9)。続いて登場する「アモン人」もまた同じく「ロトの子孫」なので「彼らに争いをしかけてはならない」と命じられます。神が彼らにその地を「所有地として与えた」からです(19)。

こうして、イスラエルは行く先々で立ちどころ相手を見境なく撃破しながら前進したのではなかったということがわかります。その都度その都度、神の命令に聞き従いながら前進しました。戦うなど言われたら、戦いません。とりわけ、相手が親戚や同族ならば、最大限相手を尊重し、代価を払って水と食料を買ったのです。

しかし、そのように平和に通過できる相手ばかりではなかったことも記録されます。荒野には好戦的な敵も待ち構えていました。それがヘシュボンの王シホンです。シホンについてよくご存じの神は、シホンがエジプトの王パロのように心頑なにイスラエルに敵対することを見越して命じます。「立ち上がれ。出発せよ。アルノン川を渡れ。見よ。わたしはヘシュボンの王エモリ人シホンとその国とを、あなたの手に渡す。占領し始めよ。彼と戦いを交えよ。」(24)そこで、イスラエルはヘシュボンと戦うことを決意しますが、しかし実際に戦争となると、いきなりというのではなく、まずは使者を通じて「和平を申し込んで」からというきちんとした手順を踏みます。「あなたの国を通らせてください。私は大路だけを通って、右にも左にも曲がりません。食物は金で私に売ってください。それを食べます。水も、金を取って私に与えてください。それを飲みます。徒歩で通らせてくださるだけでよいのです。セイルに住んでいるエサウの子孫や、アルに住んでいるモアブ人が、私にしたようにしてください。そうすれば、私はヨルダンを渡って、私たちの神、主が私たちに与えようとしておられる地に行けるのです。」(27-29) 実に低姿勢で、慎重に、先の「同族」に対するように交渉しています。でも、当のヘシュボンの王シホンは「強気」になり、パロのように「心をかたくなに」して、イスラエルを亡き者にしようと「迎えて戦うため出てきた」のでした(30-32)。そこで、生存を脅かされたイスラエルは、彼らと戦って、彼らを滅ぼしたのでした(31-34)。

こうして、イスラエルは、神の命令の通りに、和平を働きかけ、あるいは場合によっては戦いながら、荒野で四十年を過ごします。神への不信仰によって、四十年間、荒野をさまよう負い目を負わされたイスラエルでしたが、その間、神を信じて、神に従うことを徹底して訓練されます。

モアブを通過してゼレデ川を渡った時、モーセは次のように解説します。「カデシュ・バルネアを出てからゼレデ川を渡るまでの期間は三十八年であった。それまでに、その世代の戦士たちはみな、宿営のうちから絶えてしまった。主が彼らについて誓われたとおりであった。まことに主の御手が彼らに下り、彼らをかき乱し、宿営のうちから絶やされた。」(14-15) カデシュ・バルネアでの不信仰の故に、神は、イスラエルが四十年間荒野をさまようことを宣告なさいます。「あなたがたが、かの地を探った日数は四十日であった。その一日を一年と数えて、四十

年の間あなたがたは自分の咎を負わなければならない。こうしてわたしへの反抗が何かを思い知ろう。」（民数記 14:34）同時に、その時神に逆らった会衆は、ひとり残らずカナンを見ることなく、荒野で死ぬことが宣告されます。「主であるわたしが言う。一つになってわたしに逆らったこの悪い会衆のすべてに対して、わたしは必ず次のことを行う。この荒野で彼らはひとり残らず死ななければならない。」(35) そして、まっ先に悪意ある報告をして反逆を扇動した斥候たちは、その場で神に打たれて死ぬことを宣告なさいます。「モーセがかの地を探らせるために遣わした者で、帰って来て、その地について悪く言いふらし、全会衆をモーセに眩かせた者も。」(36) こう宣告されて間もなく、「その地をひどく言いふらした者たちは、主の前に、疫病で死んだ」のでした(37)。

この後の民数記の記事を見ると、コラとダタンの反逆事件が起こって、反逆者の約一万五千人が神罰で打たれ、神に不平をつぶやいた多くの者が、「燃える蛇」にかまれて殺されます(16章、21章6節)。荒野での四十年の間、あまり良い記事は見当たらず、「この荒野で彼らはひとり残らず死ななければならない」との神の死刑宣告の成就を印象づけるかのように、一人また一人と荒野で息絶えて死んでいきます。そうして、最後に祭司アロンがホル山で息絶え、先の「燃える蛇」事件で「多くの人々」が神に打たれて後、「ゼレデ川」を渡るのです(21:12)。

申命記2章14~15節のモーセの解説によれば、アロンが息絶え、「燃える蛇」事件で「多くの人々」が荒野で息絶えて「ゼレデ川」を渡るこの時に、神の宣告は完全に成就したことがわかります。すなわち、「この荒野で彼らはひとり残らず死ななければならない」との死刑宣告です。神のことばは生きています。神がひとたび語られるや、そのことばは必ずその通りに実現するのです。

厳しく、呪われた荒野の四十年でしたが、すべてが悪いことだらけであったわけではありません。エドムから必要な食糧と水を買うよう命じる理由として言われたみことばに驚きます。「事実、あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださったのだ。あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ、あなたは、何一つ欠けたものはなかった。」(7) 行けども行けども見渡す限り荒野という「この広大な荒野の旅」に於いても、「あなたの神、主は、この四十年の間あなたとともにおられ」と言います。この上なく罪深いイスラエルでしたが、神は彼らを見捨てませんでした。そして何と、「あなたの神、主は、あなたのしたすべてのことを祝福し、あなたの、この広大な荒野の旅を見守ってくださった」と言います。それで、「あなたは、何一つ欠けたものはなかった」のです。

一人また一人と荒野で死に絶えるという、不毛で絶望的な「荒野の四十年」でしたが、それでも神の恵みは充分にあったのです。神は彼らと共にいて、彼らの旅を見守り（「知る」の意味）、彼らの悩み苦しみをすべてご存じで、彼らのなす手のわざを祝福なされたので、彼らには「何一つ欠けたものはなかった」のでした。私たちにも言えることですが、この広大な荒野にも神の恵みは充分あるのです。